



明治大学図書館 第11回書評コンテスト



受賞作品集



2021年度



第11回 書評コンテスト 結果発表

明治大学図書館書評コンテスト選考部会による
厳正な選考の結果、下記の8作品の受賞が決定しました。

	所属・氏名	書評対象図書／著者名
最優秀賞	文学部 高橋力也	大杉栄評論集/大杉栄著
優秀賞	情報コミュニケーション学部 宮根大樹	動物農場/ジョージ・オーウェル著； 山形浩生訳
特別賞 (紀伊國屋書店賞)	文学部 稲葉夏花	オルタネート/加藤シゲアキ著
特別賞 (三省堂書店賞)	文学部 桑島直寛	宮本輝全集第1巻～泥の河・螢川・道頓 堀川～/宮本輝著
特別賞 (丸善雄松堂賞)	文学部 長谷川楓	町でいちばんの美女/チャールズ・ブ コウスキー
佳作	政治経済学部 石川芳季	最悪の予感：パンデミックとの戦い/ マイケル・ルイス著；中山有訳
佳作	情報コミュニケーション学部 宮本萌衣	トニオ・クレーゲル/トーマス・マン 著；高橋義孝訳
佳作	国際日本学部 山田峻輔	朽ちていった命 -被曝治療83日間の 記録-/NHK「東海村臨界事故」取材班



講 評

書評コンテスト選考部会員

明治大学図書館副館長 管 啓次郎

(理工学部教授)

受賞者のみなさん、おめでとうございます。コロナに翻弄されるこの状況下、2年ぶりに書評コンテストを開催することができて、ほんとうにうれしく思っています。図書館にはいつでも本があり、大学とは何よりも本を読む場所です。それはどんなときにも変わりませんが、現実には日々の行動が制限されてきた過去2年あまり、学生のみなさんと本＝書物との関係も少しだけ変わったのかもしれませんが。本の実物に出会うチャンスが少し減り、一方、電子媒体による読書の割合はずいぶん増えたのかもしれませんが。しかし現在のところ、電子本はあくまでも紙の「本」の形態を真似たものとしてあり、それは本質的な部分では、これからも変わらないでしょう。

本の本質とは何か。それが文章だということです。文章とは言語をつらねたものであり、文(つまりセンテンス)の織物です。しかしあらゆる文章にはなんらかの主題があって、その主題のまわりに言葉が集い、はっきりとわかるひとつの流れを作っています。そして文章は、ひとりの人間によって書かれる。一見、主題がなく漫然と書かれたように見える文章でも、そこには必ず、語と語の連結、文と文の連結のあいだに、ひとりの個人の判断があり、吟味があります。その文章は、その人によって、どう書かれているのか。この「どう書かれているのか」というレベルまでを読むか読まないかが、読書に関しては大きなちがいを生むと思います。

私たちは毎日、おびただしい言葉にふれます。音声を聞き、文字を読みます。文字の大部分は、ただなんらかの情報を私たちに教えて、そのまま去ってゆくことでしょう。これに対して主題化された文章は、それがどんなかたちで訪れるか、長いか短いか、どんな条件の下で読まれたかには拘らず、いわばその主題を核として結晶した状態で、私たちの記憶に残ります。本は、どんな本でも、そのように主題をもつ文章が集まった、一種の束のような状態で存在するものだと思います。





ます。

事実か創作か、フィクションかノンフィクションかも、関係ありません。一般むけの本なのか、専門書なのかも、関係ありません。肝心なのは、本を読むとは文章を読むことであり、それはひとりの人間が主題化した思考の流れを、ひとりの人間として受け止め、その線を自分が延長してゆくという部分です。この世には文字通り、無数の情報があり、世界の把握に無数の仕方がある以上、主題とされることも無数にありえます。だったらどうすれば、世界という混沌そのものを考えることができるでしょうか。

おもしろいことに、人間はどんなことについても、ある何かをすでに身につけた人に説明を受けることによって、もっとも効率よく、まずまず正確に、学ぶことができるものです。なんらかの主題について言語で記され、そこに収められた文章を誰でも読むことができる「本」という物体は、もっとも平等で効率のいい知識・認識の伝達形式だといえます。その本が、しかもよく選ばれた本が、数十万冊という規模で集まっている図書館という場所こそ、まさに私たちを育ててくれる知識の森だといっていいでしょう。

そして先ほどいったとおり、「その本がどのように書かれているのか」を問うところまで降りていったとき、批評がはじまります。本と本との関連が見えてきたとき、どんな分野であれ、研究がはじまります。今回の書評コンテストの入選作を改めて拝見して思ったのは、学生のみなさんの意識が正確に、私たちが生きるこの社会や歴史にむかっているということでした。これは対象とした本がノンフィクションかフィクションか、どのようなレベルで書かれているかには拘らず、読者としてのまなざしが、自分のふだんの生活圏を超えて遠くのことまで知ろう、考えようという意識に支えられているということです。

そんな気持ちをこれからもいっそう育て、自分が追求したいと思える主題を選び、そんな主題について書かれた文章を探して、読み、学んでいきましょう。読書にはじまった線だけが、現実を本当に変えることにつながってゆきます。今回の書評コンテストが、またみなさんの新たな出発点になることを、心から願っています。



最優秀賞

『大杉栄評論集』 大杉 栄著

文学部史学地理学科2年 高橋力也

私たちがあたりまえだと思っている日常はいとも簡単に崩れ去ってしまう。直視するのも厳しい現実を今回のコロナ禍で突き付けられた。「新しい生活様式」や「ニューノーマル」という言葉が氾濫しているのを見ると、これまでの日常とコロナ禍で変わってしまった現実の整合性を取り繕っているような気がする。生きた実感のない空虚な生活の中で『大杉栄評論集』に出会った。

大杉栄は一八八五年に香川県に生まれた。三八歳の時、関東大震災の混乱のさなか甘粕正彦率いる憲兵隊に拘束され、伊藤野枝、橘宗一とともに虐殺された大正時代のアナキストである。アナキストとは、アナキズムを思想信条とする人間のことだ。アナキズムは一般的には「無政府主義」と訳されるがこれは正確とはいえない。アナキズムの語源はギリシア語の *anarchos* に遡り、接頭辞の *an*(アン)と *arche*(アルケー)が合わさってできている。アンが「～がない」という意味で、アルケーが「支配」や「統治」を意味している。アンアルケー(支配がない)でアナキーとなる。このアナキーに「～主義の」を意味するイズムを合わせてアナキズムとなる。すなわち、アナキズムとは政府のみならずあらゆる支配や統治、権威を否定する思想といえる。

この本には大杉が残した文章三九編が収録されている。そのどれもが、現代においても古びることのない鮮烈な檄文となっている。「自我の棄脱」の中で、大杉は私たちが普段「自分の自我」だと思っているものは実際のところ他者の意志によって形作られたものだと指摘する。何を買うか、何を食べるか、一見すると自分で選択したかのように見える日常の行動であっても流行や社会規範など自分以外の何者かによって無意識のうちに規定されているというのだ。このように自分の自由意思の存在を否定されてしまうと、たとえ自分の意志で決定して行動したとしても誰かの言いなりになってしまっているような残念な気持ちになってしまう。しかし、自己を徹底的に解剖して「自我」の皮を一枚一枚脱ぎ捨て、まっさらなゼロの状態に至った時に「真の自我」と邂逅し「他人の自我」を打ち破ることができる」と大杉は説く。

大杉が生きた時代は、政府による出版物の検閲が行われ、自由な表現活動を行うことはできなかった。大杉が発行した雑誌も何度も発禁処分の憂き目に遭っている。そんな不自由の中であっても大杉は澁刺と自我を表出し続け自分の生を生き抜いた。アナキーを生きる大杉栄の思想に触れることで自分の生を見つめ直し、自分と他者の想像を超えた本当の生を生きていくことができるはずだ。この本は、コロナ禍で抑圧され鬱屈とした生を蘇らせる起爆剤となるに違いない。

優秀賞

『動物農場』 ジョージ・オーウェル著、山形浩生訳

情報コミュニケーション学部情報コミュニケーション学科4年 宮根大樹

「折に触れて読み返す本の一つ」と書かれた帯が書店で目に留まり、迷わずこの『動物農場』を購入した。これは、人間の管理に対抗し、あらゆる動物は平等であるという「動物主義」の理想を実現した「動物農場」を設立するところから始まる。知力に富んだブタたちの呼びかけによると、対等な関係で互いを補い合うことで、以前よりも豊かで快適な生活を送れるようになるとのことであったが、果たしてうまくいくのか。

寓話調で進められる物語は読みやすい。しかし、物語の随所に散りばめられる辛辣な批評の効果もあって、物語が大団円とは程遠い結末を迎えるのであろうことを覚悟しながらページをめくった。

著者のジョージ・オーウェル(本名エリック・アーサー・ブレア)は1903年当時イギリス植民地であったインドで生まれた。他の著名な作品として、ディストピア小説『一九八四年』がある。

『動物農場』は1943年末から執筆が始まり、1944年2月に完成した。第二次世界大戦の渦中だった。ソ連の参戦後、戦況は連合国側に有利に進められたが、その後の世界を社会主義と資本主義に二分する火種がくすぶっていた。『動物農場』にも、そうした影響を感じさせるところが多い。というのも、ソ連に一定の配慮を見せていた当時のイギリス社会の潮流に逆らう形で『動物農場』は執筆されたのだ。そのため、1945年になってようやく出版されるなど、社会への発信に困難が伴ったのである。しかし、戦後はアメリカ主導の教育に積極的に用いられているのである。

動物たちは「七戒」というルールを作り平等性を確保しようとするが、気がつけばブタたちは、「あまりに硬直した平等主義は動物主義の原理に反する」と主張し権力を拡大させていく。ブタの子供だけに教育を施す一方で、他の動物たちが理解できないような言葉や、根拠のない数字を用いて自らの支配を正当化する。説明が受け入れられず、一部から不満が出たときには、レトリックを巧みに利用して批判を煙に巻くことで、自分たちに都合の良い農場体制を作り上げていく。農場での権力構造の中に垣間見える著者の主張を丁寧になぞることで、『動物農場』は単なる寓話から、当時の社会を痛烈に風刺した小説へと変貌する。

平和だった世界が、目に見えない支配体制によって浸食されていくストーリーには、少しずつわが身が毒に侵されていくような恐怖を感じた。現代社会においても、ブタたちのように富める者はさらに富み、ほかの動物のように貧しい者はますます貧しくなるという構造は変わっていない。恵まれた教育を受けられる者はごく少数で、その一方、大半の者は時の権力者にとって都合の良いことだけを教え込まれ、何ら疑問を感じないという教育制度の現状。為政者にとって、後者ほど扱いやすい存在はいない。そうした意味で『動物農場』は、些細なことでも違和感を覚えた時に読み返せば、曇っていた視界がクリアになる現代への警告となる書物である。

特別賞 紀伊國屋書店賞

『オルタネート』 加藤 シゲアキ著

文学部文学科2年 稲葉 夏花

「澄みわたる空のような本だ」

評者の、この本に対する第一印象である。なぜそう感じたのかと問われたら、主人公である高校生たちがまとう爽やかさや眩しさが、晴天のイメージと結びついたから、と答えるだろう。ちなみに、著者の二作目の小説である『閃光スクランブル』を中学生時代に読んだときは、薄暗い曇天の空を思い浮かべた。『オルタネート』が、どんよりとした印象とは対照的な清々しさを持ち合わせているからこそ、その清涼感が一層際立って心に沁み込んできたのも理由の一つだ。

この本は、複数の人物の物語が次々に切り替わりつつ同時に進行していく、という形をとっているのがユニークである。高校生限定のマッチングアプリ・オルタネートが普及した円明学園高校を中心にそれぞれの物語は進み、次第にそれらが結びつきつつ展開していく。もちろん、マッチングアプリという現代ならではの文化が題材として取り上げられていることはこの本の大きな魅力だ。しかし、そのことよりもむしろ、液晶画面が主な活躍の場となりスピーディーに流れていく時間の中で、登場人物たちがいかにして「私」として生き、育っていくのか。そんな彼らの姿が丁寧に書かれているところが心に強く残る。日々を忙しく過ごしている者にとってはこの穏やかさが、木漏れ日のような安らぎを感じさせてくれるのである。

また、随所に出てくる料理の数々も魅力のひとつだ。円明学園高校の調理部の部長・蓉(いるる)が運動部への差し入れとして作ったとうもろこしのおにぎりや、高校を中退して単身上京してきた尚志が人生で初めて作った不格好な餃子。どの料理にも等身大の温かみがあって、なおかつ物語の鍵となるシーンで絶妙な存在感を放つ。だからこそ、読み進めるごとにお腹が空いてくるのである。この本はあくまで人間が主役の物語である一方、料理も大きなテーマとなっていて、登場人物の生活の中で食べるという行為がいかに大切なことであり、人生の一部として染みついていることであるかということが分かる。それと同時に、評者の日常にも当たり前のように存在している、母の手料理や祖父母の元から届く野菜など、自らを取り囲む人と料理の温度を改めて感じさせられるのだ。

世間で青春という概念がやけに神格化されている実態を若干疑問に思うのだが、この本を読むと、素直に青春への憧れや希望が持てる。未だ影響を与え続ける感染症のまん延や、それに伴う行動制限などによって、世代を問わず心が曇りがちな昨今、初夏の日差しのごとくきらきらとした輝きを与えてくれるこの物語は、まさに晴天のような存在と言って良いだろう。

特別賞 三省堂書店賞

『宮本輝全集第1巻～泥の河・螢川・道頓堀川～』宮本輝著

文学部文学科1年 桑島直寛

全集は作家の「人生」そのものであり、1人の文学者が生涯をかけて追及したテーマに迫ることができるのが、全集の魅力の一つだろう。学生時代、時間だけは売るほどある。一人の作家の生きざまをじっくり追える、最後のチャンスに逃す手はない。

現在は芥川賞の選考委員も務め、『錦繡』や『流転の海』などで知られる純文学界の重鎮、宮本輝。彼の全集第一巻には、初期作品であり、「川三部作」と呼ばれる傑作三編が収められている。

大阪湾の安治川周辺で過ごした少年時代の苦い記憶を扱う太宰治賞受賞作にしてデビュー作の『泥の河』。親父や友人の死を目の当たりにし、思春期の多感な時期の初恋、苦悩を経て成長する少年の姿を描いた第78回芥川賞受賞作『螢川』。金を工面しながら大阪の大学に通う邦夫と、かつてビリヤードの天才と呼ばれた武内の過去の悲しみが書かれた『道頓堀川』。

「川三部作」では、宮本輝の自伝的な要素も含みつつ、川の周辺に生きる人間の生活や真理を生々しく描き、そして時に現実的な残酷さを含みながら、幻想的な筆致で生と死について語られる。『螢川』では高校受験を控えた主人公の親父が死に、さらには仲が良かった友人も川でおぼれて死んでしまう。大切な人間が目の前から消えてゆく「死」の悲しみは、物語後半、夏の夕涼みの川に現れる螢という「生命」の輝きと対比され、主人公の心理に微妙なゆらぎをもたらす。

純文学には大衆文学に出てくるカッコいいヒーローや、単純な善悪だけでは語りえない文学という「川」の深みが流れ、人生を豊かにするためのヒントが転がっている。その一方で、とにかく純文学は難しい。初心者ならば途中で投げ出すだろう。起承転結がない作品もあれば、隠喩など比喩が多すぎて複雑な物語も多い。また、登場人物が必ずしも魅力的だとは限らないし、最後の最後まで謎が謎のままである作品もある。テーマが最後まで見えないものすらある。初心者と純文学の相性はとにかく悪い。それでも文学ビギナーに何か一冊勧めるならば、宮本輝の「川三部作」を私は推薦したい。なぜなら三作品ともテーマが一貫していてわかりやすく、生と死のコントラストを軸に読めば、ビギナーでも作者の主張が容易に読み取れて、スルッと物語に没入できるからだ。

YouTube やソシャゲに時間を費やしてばかりの大学生活では、人生は空っぽになる。若くて情熱にあふれるうちに、文理の境なく、文学に込められた「意味」をじっくりと味わい、自分の生きる道に彩を加えるべきではないだろうか？その足掛かりとして、宮本輝の作品群を私は勧めたい。

特別賞 丸善雄松堂賞

『町でいちばんの美女』チャールズ・ブコウスキー著

文学部文学科2年 長谷川 楓

2020年11月26日、午前4時。東京都渋谷区のとあるバス停に座り眠っていた60代の女性が40代の男性によって暴行を受け殺される事件が起きた。殴り殺された女はいわゆる「路上生活者」だ。家賃を滞納した結果退去を命じられ、路上で生活をはじめた。殺された際の彼女の所持金は、8円だったという。

多くの人間が、自分より低い立場に「弱者」という存在があり、そのような存在には、軽蔑の眼差しを向け、暴力、迫害などを行っても良いという認識を保有し、その認識を持つ人々が働き、生活することで構成される社会の中では、彼らに「弱者」に当て嵌められた者たちも、ある意味当然だとも言うようにそれらをただ受け続けている。その暴力のレベルは、多くの人々が同一の対象を弱者として認識し、その認識が共有されればされるほど、増幅し強化される。先に挙げた撲殺された女性が殴られながら分類されていた「路上生活者」を始め、「障害者」、「性的少数者」、「貧困者(特に生活保護受給者)」なども、長らく「弱者」として設定され続けた。このような弱者とみなされる人々、社会的地位においてどん底に有るとされる人々を小説に描いた作家は多い。だが、ブコウスキーほど克明に彼らを描いている作家はいない。なぜならブコウスキーもそのどん底に生涯居続けたからだろう。

アメリカ中をふらつきながら、まともな職にありつけず、絶えず酒を飲んでいる彼がそれまで書いた短編が多数収録されている「街でいちばんの美女」(新潮文庫)であるが、その中で現れる人々は、自傷行為を繰り返す女、セックスのためのロボットを作ったドイツ人の老人、射精の瞬間をカメラに収めようとする男など、社会から鼻をつままれ、足蹴にされるような人々ばかりである。彼らが口にし、実行することといえばセックスか酒のことばかりで、常に赤貧にあえいで生きている。彼らがお伽話のシンデレラのように、何か現状が改善されることはない。ゴミとして社会に足蹴にされ、踏み潰され続けながら、彼らからもその生活を打開しようという意志は見せようとしない。

彼らの姿に顔を顰める人も大勢いるだろう。だがその醜さにこそ、彼が描きたかったものがあつたのではないかと私は思う。ただそれは、常に弱者たちに対して多くの人々が向ける敵意や軽蔑はもちろん、その反対となるその者たちへの肯定や、慈しみ続ける眼差しも、彼らが属している弱者という存在が常にもっていると決めつけられたピカレスク的な美徳も生き様の提示(「これが人間の本当の姿だ」と言うような態度)などでは、全くない。小説の中で描かれるのは、他者からの、そして自身からの残酷性に満ち満ちた人生をどん底の人々がどん底のままにただ生きる姿が描かれているだけだ。このただ生きることには、なんら意味や価値は付与していない。生きることはなんの意味も持たず、それを有し、行使している私たちになんかの恩恵も与えはしない。しかしその生は、どんな良識も道徳も理不尽も差別も卑小なものだと思わせるほどの甚大さをもって、この世界に存在している。ブコウスキーの小説を読むと、そんな生きていることの計り知れなさを強く感じる。

佳作

『最悪の予感：パンデミックとの戦い』マイケル・ルイス 著

政治経済学部政治学科4年 石川芳季

「失敗は成功の基」という言葉を聞いたことがある人は多いだろう。しかしながら、その言葉を聞く割には失敗が許されていないに思える。医療判断を誤れば医師は責められ、政策が失敗すれば政治家や役人は責められる。これらの他にも現在の社会は善意の失敗であるかないかにかかわらず、1度の失敗も許されないことが多い。私たちは失敗をしないように注意を払い、成功する可能性が高い方法を選択する。けれども、上記のことは過去の経験を踏まえて何が間違いであるのか分かっているからこそできることである。その点ではやはり「失敗は成功の基」であるかもしれない。そうであるならば、経験したことがないことに対してはどのように対処すべきであるだろうか。例えば、多種多様な人々が積極的に関係しあうグローバル社会でのパンデミックはどうだろうか。

この本は新型コロナウイルスの流行に関して、アメリカでどのような動きがあったのかを記録したものである。しかしながら、この本の主人公はトランプ前大統領でもなければバイデン大統領でもない。この本でスポットライトが当てられるのは保健衛生官や医師、科学者など、無名ではあるが社会において重要な役割を担う人達である。彼らは約100年前のスペイン風邪や数年前に発生した新型インフルエンザなどの経験から、それぞれの分野において感染症の流行を防ぐ方法を模索していた。やがて、無関係であった彼らは新型コロナウイルスの流行を契機に1つのグループとしてまとまっていった。この本では彼らの奇妙な縁がどのように繋がり合い、各州の政治家や連邦政府など様々な人々の注目を集めるようになっていったのかが描かれている。

けれども、この本はハッピーエンドの小説ではない。上記のような動きがあったのにもかかわらず、世界の人口の4%を占めるアメリカでは世界の新型コロナウイルスの死者数の20%を占めるという結果になってしまった。すなわち、この本は新型コロナウイルスに有効な対応策があったにもかかわらず、なぜそれが機能しなかったのかということを考えさせるものである。

ある出来事に関して振り返ることがあるが、それは後日の視点からの結果論として述べられることが多い。実際には、その時点では不完全な証拠に基づいて意思決定をしなければならないという辛さがある。そして、失敗を恐れるあまり、何かやったことで非難されるよりも何もやらないことで非難されることが選ばれてしまうこともある。この本は後世からただ批判するのではなく、その時なぜ動けたのか、あるいはなぜ動けなかったのかを登場人物の心理や考えを交えて解き明かそうと試みている。そのことがこの本の物語を濃厚なものにしており、私達をより深くまで惹きつけるだろう。

この数年で私たちは多くのものを失った。しかしながら、奪われたものを数えるのではなく、残されたものを活かして次の成功に向けて備えることが必要だろう。その準備を行い、栄光の未来を手に入れるためにも全ての人にこの本をお勧めしたい。

佳作

『トニオ・クレーゲル』トーマス・マン著

情報コミュニケーション学部4年 宮本萌衣

『トニオ・クレーゲル』は 1903 年、ノーベル文学賞作家であるトーマス・マンが 28 歳のときに発表した作品である。この作品はその名の通りトニオ・クレーゲルという芸術家が主人公である。リザヴェータという友人との対話や手紙を通して、ハンスやインゲボルクといった主要な登場人物や周囲の人々、社会に対するトニオの思いや、芸術への向き合い方、自分の在り方などを考えるという物語になっている。

主人公は、自分と世間の感覚にずれを感じており、友人や社会の人々の「普通」の部分に強く惹かれている。特に、友人であるハンスは主人公にとっての憧れであり大切な友人であるが、一方でハンスにとって主人公は大勢いる友達のうちの一人にすぎない。主人公とハンスは一緒に帰る約束をしていて、主人公はとても楽しみに待っていたが、友人はその約束を忘れてしまっていた、というエピソードが描かれていたが、気持ちの重さの違いにとても切なくなった。また、自分とは対照的な「あちら」側に行きたいのにに行けないことに対して僻んでしまう一方で、正反対の人へどうしたって憧れてしまう、という感情は私にも覚えがあり、つい主人公と自分と重ね合わせてしまった。

主人公の「芸術家としての方向性」という悩みは高尚なもので、私たち一般人とはあまり関係のないようなことに思える。しかし実際のところ “芸術世界へ憧れを持ち世間の人々を軽蔑している一方で、普通にも強いあこがれを持ち世間にうまく馴染めない自分に孤独を感じており、他者とのつながりを求めている” というような感情を抱えていることが分かる。

トニオの悩みは、案外多くの人共感できる感情なのではないだろうか。

この「トニオ・クレーゲル」は、矛盾・対立した感情がテーマになっている。芸術家としても俗人としても上手く生きることができない生き辛さがストーリーの主軸となっており、一見私たちには遠い悩みや感情であるようにも思える。しかし、友人への気持ちの重さの違いに対する辛さ・悲しさや、自分と正反対のもの・ことへの憧れなど、誰もが一度は感じたことのある普遍的な感情が細やかに描かれている。哲学的な内容もあるため一度読むだけでは難しいところも多いが、理想と現実と板挟みになりながらもトニオの芸術を追求し続けるまっすぐな姿勢は多くの人々を惹きつける。それが、100 年以上もこの作品が愛され続けている理由なのではないだろうか。

佳作

『朽ちていった命―被曝治療83日間の記録―』

NHK「東海村臨界事故」取材班著

国際日本学部4年 山田峻輔

1999年9月30日に茨城県東海村の核燃料加工施設で、不正な手順による核分裂連鎖反応が発生する事故が起きた。付近にいた作業員3名が多量の中性子線を浴びて被曝、2名が死亡した。本書は後に日本の原子力事故で初の犠牲者となる大内久さんと、彼の治療を担当した医療チームの83日間にわたる記録を克明に描いたものである。

被曝者の大内さんが医療チームの待つ施設に到着した時に、多くの医療関係者は驚きを隠せなかった。彼の意識は明瞭で、医療チームへの受け応えは正確だったからだ。医療チームの間では、「負け戦」という気持ちと、搬入時の容態を見て、「もしかしたら…」という気持ちが交錯する。過去の医療データは参考にならず、選択肢は全て試すという、暗中模索の日々が続く。

当初は普通の人と変わらなかった大内さんの身体にも徐々に変化が現れる。白血球の数が極端に減少し、皮膚は再生されず剥がれ落ちていく。造血幹細胞移植が行われ、皮膚の培養移植など、様々な治療が行われる。しかし、治療の中で、大内さんの我慢は限界に達し「俺はモルモットじゃない」と叫ぶ。安楽死も尊厳死も不可能な状況下で、医療チームは意識が無くなり、助かる見込みの無い大内さんを前にして、被曝治療を越えて、生の在り方に向き合っていく。

83日間に及ぶ治療の末に大内さんは、亡くなった。体の組織の殆どが損傷したが、心臓の筋肉だけは無事であった。残された医療チームはそれを知り、患者の声なき生への執着と、施した治療が本当に患者のためになっていたのかというジレンマに直面し、葛藤する。死亡後の記者会見で、主治医の前川医師が原子力防災において、命の視点が欠けていた事を述べた。これまで表に出さなかった医者としての無念と、杜撰な管理への怒りが噴出する。

10月14日に衆議院は解散し、選挙運動に突入した。日々テレビ番組やSNSなどで、各党は政策を訴え、議論を重ねている。しかし、原子力政策や、安楽死や尊厳死といったテーマが語られることは少ない。各党に差はあるが、多数の政党は、代替エネルギー開発を訴える。しかし、それで問題は根本的解決に至るのだろうか。過去30年間に日本は複数の原子力災害を経験した。脱原発、安全なエネルギー開発へと舵を切るのは当然である。しかし、将来的に開発されるエネルギーが全く安全である保障は無い。形を変えて事故が起きる可能性はある。

JCO臨界事故の原因は、核物質を管理する人間側にあった。いわば「人災」である。しかし、事故の原因が関係者の間のみで共有されても、意味がない。原因や危険性が広く市民の間で共有され、適切な対策を経て初めて、教訓は生かされる。また、助かる見込みのない命との関わり方も議論する必要がある。事故から20年以上経つが、この事故が残した問題は解決していない。本書はそのことを、静かに、しかし力強く伝え、読者に現実の問題と向き合い、考えることを促している。



受賞の言葉

最優秀賞

文学部2年 高橋力也

読書は自己破壊だと私は思う。本を読むという行為はその本に書かれている文章、すなわち著者の思想、価値観との対話だ。読者はたいてい何らかの疑問を持ち、その答えを求めて本を開く。読者の抱いた疑問について読者よりも長い間向き合っている本の著者はその道の先輩というべき存在だ。とすると、読者は著者の思考の水準に合わせていることを求められる。なぜなら読者が本に書かれている文章を理解して疑問に対する答えを導き出すためには、その著者と同じ水準で思考する必要があるからだ。そのためには自分の思考の枠組みを一度破壊して、著者の水準に合わせて再構築しなくてはならない。私はここに読書の自己破壊作用を見る。こうして自分の既存の価値観を壊した時にはじめて読者は自分の求める答えを手にする。しかし、答えを得たと同時にまた新たな疑問が生まれ、その疑問の答えを見つけるべく知的好奇心に衝き動かされ、絶えず本を読み続ける。そうしていくうちに以前の自分とは全く違う新たな自分を発見することになるだろう。私はこれからも読書を通して新しい自分であり続けようと思う。

優秀賞

情報コミュニケーション学部4年 宮根大樹

私にとって、本はさまざまな経験を与えてくれる存在です。

興味のあること、好きなことはもちろん、それまで全く考えもしなかったことも、文章を通じて発見し、学ぶことができます。

卒業後も、充実した人生を歩んでいけるよう、幅広く本と触れ合っていきたいと思います。





特別賞（紀伊國屋書店賞）

文学部 2年 稲葉夏花

私はこれまで書評という存在自体を深く知らず、そのため自ら書評を書くことを始めてまだ一年も経過していませんが、今回評価していただき大変光栄に思います。この機会を一度きりにせず、今後も様々な言葉に触れ、自分の考えをまとめあげることによって取り組んでいきたいです。

特別賞（三省堂書店賞）

文学部 1年 桑島直寛

明治大学に入って感じたのは、大学生なのに本を読まない方が非常に多いことです。文学部なのに、本の話が通じない。なんと勿体無い。どんな本なら興味を持って多くの人に読んでもらえるか、それを考えながら、皆さんに読んでもらいたい純文学を選び、書評しました。ぜひ宮本輝をご一読していただけたらと思います。

特別賞（丸善雄松堂賞）

文学部 2年 長谷川楓

自分で作り上げた考えを流布させ、感染させ、相手を征服させよう、できるだけ多くの人を自分の考えで染め上げようとするための言葉が最近流行っている。その時、その種の言葉は非常に理解しやすいやさしげな姿をしながら私たちの生活に流通している。それとは全く異なる種類の言葉があることを教えてくれるのが本、特に文学ではないかと思う。そのような本とそれを受け入れる読者が増えることを祈って。ありがとうございました。





佳作

政治経済学部 4 年 石川芳季

この度はこのような機会をいただきありがとうございます。本を読むだけでなく、内容を理解してアウトプットすることの大変さを感じました。人の価値が軽んじられていく世の中で、その力は自身の盾になると同時に矛にもなると思います。この力を育む場として、書評コンテストの発展をお祈りしています。

佳作

情報コミュニケーション学部 4 年 宮本萌衣

この度は明治大学図書館書評コンテスト佳作に選出していただきありがとうございました。

読書のおかげで今の自分がいると言っても過言ではありません。

「トニオ・クレーゲル」は多くの人が共感できる作品だと思いますので、ぜひ一度は読んでみていただきたいです。

佳作

国際日本学部 4 年 山田峻輔

この度は素晴らしい賞を有難うございました。

本書で取り上げられた事故は、私の生まれた隣町で発生し、当日には実父が施設内にいました。

この事実を知り、自分はこの事故と向き合わなくてはならないと思いペンを取りました。本書が、読んだ方に原発に賛成か反対かという二項対立を超えて、原発問題が提起する人として生きる意味や、その恩恵と危険を考えるきっかけになれば幸いです。



明治大学図書館「第11回書評コンテスト」

応募要領

明治大学図書館は、学生の皆さんが読書に一層興味を持ち、図書館を積極的に活用して下さることを目的として、下記の要領で「第11回書評コンテスト」を開催します。どうぞ奮ってご応募ください。

書評とは本の内容を紹介し、論理的に評価・批評をした文章のこと。
このコンテストでは、対象となった本を読んでみたいという気持ちを喚起する文章を評価します。

- 1 **応募資格** 本学の学生・大学院生
- 2 **書評対象** 明治大学図書館が所蔵する図書
(文学作品・社会思想・科学啓蒙書など、分野・言語は問いません。)
- 3 **応募要領**
 - ① 字数は、図書1冊につき、800字以上1,200字以内を目安とする。
 - ② 書評は日本語で執筆すること。
 - ③ 書評対象図書名、著者名、請求記号(文庫・新書の場合はシリーズ名とシリーズ番号)、所属、学生番号、氏名を書評作品冒頭に必ず明記すること(これらの事項は字数に不算入)。
 - ④ 文書作成ソフト(Microsoft 社 Word 等)、A4横書きで作成すること。
 - ⑤ 応募作品は、本人が書いたオリジナル未発表作品であること。
 - ⑥ 応募は1人1篇とする。
 - ⑦ 応募作品の使用権は明治大学図書館に帰属するものとし、入選作品は、下記の印刷物等に掲載することがあります。
『受賞作品集』(図書館作成)小冊子、明治大学図書館ホームページやその他の大学出版物など
 - ⑧ 応募後の連絡はメールで行います。メールアドレスを用意し、連絡が届いていないか適宜確認してください。
- 4 **提出先** review@lib.meiji.ac.jp (書評コンテスト事務局)
- 5 **応募期間** 2021年10月1日(金)～10月31日(日) 23:59まで
- 6 **選考** 図書館内で設置した書評コンテスト選考部会で厳正に選考し、表彰作品を決定します。
- 7 **表彰** 賞状及び副賞(ただし、該当作品が選出されないことがあります。)

最優秀賞	1篇
優秀賞	2篇
特別賞	4篇
佳作	5篇
- 8 **入選発表** 2021年12月に、図書館内の掲示及び図書館ホームページで発表します。
- 9 **表彰式** 2022年1月下旬～2月上旬の間に、図書館長・来賓等の臨席のもと、図書館内で行います。(予定)

「書評の書き方講座」をオンラインで公開する予定です。ぜひ、ご覧ください!

明治大学図書館

第 11 回書評コンテスト

応募作品募集

明治大学図書館は、学生の皆さんが読書に一層興味を持ち、図書館を積極的に活用してくださることを目的として、

「第 11 回書評コンテスト」を開催します。

どうぞ奮ってご応募ください。

詳細は図書館ホームページ記載の応募要領をご確認ください。

■応募期間 2021年10月1日(金)
～ 10月31日(日)

■表	彰	最優秀賞	1 篇
		優秀賞	2 篇
		特別賞	4 篇
		佳作	5 篇

■入選発表

2021年12月に図書館内の掲示及び図書館ホームページにて発表します。



提出・問い合わせ先

書評コンテスト事務局

review@lib.meiji.ac.jp

書評の書き方講座

「感想文」から「批評」へ

2021/ **9/22(水)**

12:35～13:25 オンライン (Zoom)

【講師】伊藤氏貴 先生 (明治大学文学部教授)

飲食店や書籍や映画に関しては、インターネット上に無数の「評」が溢れています。

しかしそのほとんどはたんなる「感想」にすぎません。それを超えるために何ができるかを具体的に考えます。



<講師プロフィール>



文藝評論家。第45回群像新人文学賞(評論部門)受賞。

現在、東京新聞や週刊新潮に書評を連載中。著書に『告白の文学』、『美の日本』『同性愛文学の系譜』など。

★この講座は、書評コンテスト応募資格の有無にかかわらず、ご参加いただけます。

★参加方法は Oh-olMeiji と図書館 HP でお知らせします。

★書評コンテストの応募期間は 10/1 (金) ～10/31 (日) です。

【お問い合わせ先】書評コンテスト事務局 (中央図書館) review@lib.meiji.ac.jp





2022年2月3日 表彰式

2022年3月発行
編集・発行 明治大学図書館



明治大学図書館
MEIJI UNIVERSITY LIBRARY

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

TEL:03-3296-4254

URL: <http://www.lib.meiji.ac.jp/>

